

2025「ことばの森教室」第3回優秀作品紹介

＜中学校1年生＞ 作文課題「わたしの小さな挑戦」

1-①

「殻を破るためにの挑戦」

2学期も終盤に差し掛かってきた11月の中旬、廊下に「生徒会役員選挙告示1号」と書かれた紙が張り出された。それを見た私は、立候補の受付会場へと足を運んだ。立候補した理由は、やってみないと見ることができない景色があると思ったからだ。

12月に入り、選挙活動が本格的に始まった。みんなに、私の良い点と改善点について話し合ってもらった。改善点としては、「ユーモアがない」「真面目すぎる」という意見が多く出た。これは私自身も改善点として考えていたものだった。そこで、私は殻を破るためにの挑戦をすることにした。内容は、教室訪問の時に一つダジャレを言うというもの。

準備をして、本番に臨んだ。少し緊張しながらも、私は口を開いた。「投票所で、問う表情。」教室は笑いに包まれ、私は安堵感と清々しさを覚えた。この挑戦は、私を大きく成長させたと思う。

1-②

「達成感」

この前、2学期の反省を学年でする時間があった。「意見がある人は手を挙げて発表してください。」私はこれを聞いて、少しドキッとした。今までの反省会では、一度も発表したことがないからだ。変に思われたらどうしよう。恥ずかしいという不安が消えなく、周りの様子を見ているだけだった。

しかし、今回の反省会は手を挙げる人が少なく、教室が静かだった。その時、友達が一緒に手を挙げようと言つてくれた。その一言で勇気が出て、手を挙げることができた。すごく緊張したけど、最後まで発表することができた。ホッとしたのと同時に、言って良かったという達成感が出てきた。

一人では難しいことも、誰かと一緒にすればできるかもしれないと思った。今までと少し行動を変えることで、その後の気持ちが大きく変わることを実感した。この経験を生かして、仲間と協力して生活していきたい。

1-③

「苦手な殻を破って」

「お前は、ほぼ何でもできるよな。」この言葉は、大体の人に言われる。けれど、自分はコミュニケーションが大の苦手であった。ほとんど、話に入る時は相手が話しかけてくるのを待っていたのだ。

この課題に気がついたのは、丁度2学期の中盤ぐらいだった。これに気付き始めたタイミングで、後期学級役員決めがあった。これをチャンスだと思い、会長に立候補した。自分以外、立候補した人はおらず、会長になることができた。いざ仕事をやってみると、最初は人前に立つことがあまりなく、まるで卵の殻から出られないヒナみたいな感じだった。しかし、たくさん人前に立つことによって、これを生かし、友達とも自分から話しに行くことができ、殻を何とか破ることができた。

このような経験を更に生かし、3学期や2年生でも新たなことに更に挑戦していきたいと思うきっかけになった。

1-④

「その一言で」

初めて兄のスマッシュを受けた瞬間、体の奥に震えるような衝撃が走った。「自分もあんな球を打てるようになりたい。」その強い憧れが、卓球にのめり込むきっかけだった。

「相手を圧倒するサーブを打ちたい。臨機応変に対応できる選手になりたい。」と、つぶやいた私に、兄はこう言った。「卓球は百メートル走をしながらチェスをするようなスポーツとも例えられる。だから頭もしっかり使うんだ。」その一言

で、球の回転やコースを一球ごとに考え、狙った所にしつかり打つ練習をするようになった。

大会前、兄との真剣勝負。回転の読めないサーブに翻弄されながらも、戦術を意識して必死に食らいついた。そしてついに、初めて兄から1セットを奪った瞬間、思わず「よっしゃー」と拳を握った。あの瞬間の喜びは、努力が確かに実を結び始めた証だった。この手応えを胸に、これからも一歩ずつ強くなっていきたい。

1-⑤

「続けることで見えた景色」

最近の私の小さな挑戦は、期末テストに向けて毎日少しずつ勉強を続けたことだ。やる気が出ない日もあったが、「少しだけでもやろう」と自分に言い聞かせて机に向かった。特に苦手な教科では、すぐにあきらめてしまいそうになったが、分からぬところを聞いたり、教科書を声に出して読んだりして、工夫を続けた。テスト当日は、不安もあったが、最後まで集中して解くことができた。

その結果、これまで一番高い点数を取ることができた。点数を見た時、自分の努力は無駄ではなかったと強く感じた。今回の経験で「続けることの大切さ」を学ぶことができた。これからはテスト前だけでなく、普段から少しずつ復習する習慣をつけることに挑戦していきたい。さらに、この挑戦を通して、自分の努力を信じる気持ちが少し強くなつた。小さな積み重ねも、続ければ結果につながるのだと感じた。これからも、一つひとつの目標に向けて自分なりに頑張り続けていきたい。

<中学校2年生>

作文課題『熊』・『今年の夏の猛暑』のいずれかを選んで、思うことを書く

2-①

「熊の恐怖」

熊についての事件や事故を、よく耳にするとと思う。実際、私もニュースなどで毎朝聞く言葉だ。私は熊についてよく知らないし、動物園以外で見たことはないので、怖いと思わないのだが、職場体験の前日くらいに、体験先の近くで熊が目撃されたというニュースがやっていて、そこで初めて怖いと思った。「もし、体験先に行く時に熊にあつたらどうしよう」という考えがずっと出てきて、怖くてしようがなかった。行く時も、ソワソワしながら体験先に向かった。私は2日間、同じ道を一人で歩くことになるので心細かったが、幸い熊に会うこともなく普通に通うことができたので安心した。町も周辺をドローンで調査した結果、鹿が70匹ほどいたが、熊は一匹もいなかつたことがわかり、そこでようやく私の恐怖はなくなつた。

毎回ニュースで見るたびに「私の所は大丈夫だから」と思っていたが、実際に熊が出て、他人事ではないと考え方直された、怖いけれどいい経験になつたと思った。

<中学校3年生> 作文課題「学校までの通学路で見つけた小さな発見」

3-①

「つながるあたたかさ」

最近、近所や地域のつながりが薄くなっていると聞くことがある。実際、私も恵ずかしさなどがあり、挨拶をあまり積極的にできていなかつた。しかし、中学生になったのをきっかけに、自分から挨拶をする回数を増やしてみた。その中で、地域のつながりやあたたかさを見つけることができた。

挨拶をするだけではなく、そのまま軽い会話につながることが何回かあつた。定期テストで早く帰る時には、「テスト？頑張ってね。」と応援してもらえることが多かつた。また、「昔、同じ中学校に通っていた」という話を聞かせてもらえた

たこともある。話を聞かせてもらえたのが嬉しかったし、地域の人とつながっていることのあたたかさを知ることができた。

それからも自分から地域の人に挨拶するように意識している。交流するというのは大切なものだと思うから、高校に入学しても変わらず続けていこうと思う。

3-②

「多くの人に見守られている安心感」

小学校への登校時、信号や階段の所で見守りをしてくれている人が何人かいた。普段は「おはようございます」「いってらっしゃい」と挨拶するだけだったが、集合場所に上級生が来なくて困ってしまったことがあった。どうしたらいいのか分からず、不安になっていると、別の班の班長に「この子達も一緒に連れて行ってあげて」と話して、私に「上級生が来たら、先に行つたことを伝えるね」と言ってくれた。とても安心したことを覚えている。

信号の旗入れの所に友達の落とし物が掛けてあつたり、下校時に車でパトロールをしてくれている人もいた。中学生になってから、見守りの人に偶然会って、私のことを覚えていてくれて、びっくりしたのと何だか嬉しかった。

名前も知らないたくさん的人が、自分たちのことを見守ってくれていたことを改めて実感して、幸せな気持ちになった。

3-③

「目を向けることで」

「いい匂いがする。」振り返って見てみると、金木犀の花が咲いていた。毎日の登下校が楽しみになり、学校に行くのが楽しくなった。

毎日友達と歩く道には、たくさんの木々や草花といった自然がある。楽しく談笑しながら歩いている道には、たくさんの思い出もある。金木犀の花の香りが漂つてくると「金木犀の匂いがするね。」「いい匂いだね。」たわいもない会話だけれど、幸せを感じることができた。金木犀は短期間で散ってしまう。しかし、短期間でしか感じられないからこそ、特別な時間のように思うことができた。また、友達と立ち止まって、どうしてだろうと考え、周囲のことに目を向けることが多くなった。

金木犀が思い出と新しい視点をプレゼントしてくれた。小さな花で、すぐに散ってしまうけれど、ささいなことに目を向けることで、こんなにも心が動かされる。これからも、小さな発見とささいな幸せを大切にしながら、歩いていきたい。

3-④

「通学路の木と冬の空」

毎日行く道で、私は最近ある変化に気づいた。それは、通学路にある公園の大きな木の葉が、いつの間にか全部落ちてしまったことだ。1ヶ月くらい前までは、まだ黄色や茶色の葉が残っていて、地面もカサカサ音がした。でも、今朝ふと見上げたら、枝だけになっていて空が広く見えた。それを見て、いよいよ冬が本番になったんだなど実感した。

今まででは、寒いから早く学校に着くことばかり考えて、早歩きで通り過ぎていた。でも、葉がなくなった枝をよく見ると、寒さに耐えているみたいで、自分も頑張って登校しようという気持ちになった。

この変化に気づいてから、ただ歩くだけではなくて周りを見る余裕を持ちたいと思った。冬は寒くて外に出るのが嫌になるけれど、空気が澄んでいたり霜が降りていたり、冬にしかない景色があるはずだ。これからは、そんな小さな発見を楽しみながら、寒い朝も元気に歩いていきたい。

3-⑤

「学校までの通学路で見つけた小さな発見」

私の通学路には、大きな木が並ぶ道がある。夏には青々とした葉がたくさん茂っていて、夏の朝の日射しや夕方の少し強い日射しを和らげてくれていた。しかし最近、朝家を出ると、地面に落ち葉が増えていることに気がついた。ついこの前まで緑だった葉が、黄色や茶色に変わり、道の隅に集まっている。

その落ち葉を踏むと、カサカサとした音がして、冬が近づいていることを感じた。空気も前より冷たく感じ、息を吐くと白くなる。

いつも何気なく歩いている通学路でも、少し周りを見るだけで、自然や季節の変化に気づくことができる。忙しい朝でも、この小さな発見があると、何気なく歩いていた通学路が少し特別なものに感じられた。

3-⑥

「三匹の猫が気づかせてくれたこと」

学校までの通学路で見つけた小さな発見は、3匹の猫です。

最初は、家の屋根やブロック塀の上に座ってこちらを見ていて、近づくとすぐに逃げてしまうので、のら猫なのかなと思っていた。しかし、数日後、同じ通学路を歩いていると、家の窓際からこちらを見ている猫を見つけました。そこにいたのは、いつも外で見かけていた猫だったのです。そこで私は、その猫はのら猫ではなく、飼い猫なのだと知りました。その猫は外に出るのが好きですが、今の時期は寒いため、家の中でぬくぬく過ごしているのだと思いました。

この経験を通して、いつも同じ景色だと思っていた通学路でも、空の様子や風向きなど、今まで気にしてこなかったことにも目がいくようになりました。そのおかげで、登下校中の時間が前よりも楽しくなりました。また、身近な場所にも小さな変化に気づくことの大切さも学びました。

3-⑦

「つながり」

地域の人たちはみんな温かく、親しみやすい。たくさんの人達が温かく私達を見守ってくれていることが、どんなに素敵なことかを、毎日の通学の中で感じた。

登下校中、たくさん的人に会う。例えば、家の近くで農作業をしているおじいさん。通りすがりに挨拶をすると、必ず学校生活を聞いてくれる。他にも、世間話してくれるおばさんなど、たくさん的人がいる。この人達に共通することは、必ず「おかえり」と言ってくれることだ。この言葉は、都会では薄れがちなつながりを解消する特別な言葉だと思う。この言葉を通して、地域の人たちの温かみや優しさが伝わってくる。

この経験から、私達は多くの人達に支えられながら過ごしていたことを知った。そして、「おかえり」や些細な話が、私達と地域の人とをつなげてくれていることを学んだ。だから、大人になってもつながりを大切にしていきたいと思う。

3-⑧

「いつかは起こる変化」

小学校に入学してから今まで、数え切れないほど見てきた風景。それを見ると、変わっていくのは自分だけではないことを実感する。

私達の住んでいる町は、小学校と中学校が隣同士に建てられている。だから9年間、ずっと同じ道を通って学校に通っている。そんな生活を毎日続けていると、環境の変化にも当然気がつく。例えば近所の人、最近だと小学校に入学した子や高校を卒業した人がいたりと、めでたい話も聞いた。しかし変化するということは、いいことばかりではないということにも気づかされる。朝、会うと優しく挨拶してくれた老夫婦も、夫の方は亡くなってしまったらしく、妻であるおばあさんも最近腰を痛めてしまったらしい。

今までの9年間の通学を経て学んだのは、変化というものは誰にも必然的にあるもので、良いこともあれば悪いこともあるということだ。けれどその「変化」も、人間らしさがあつて良いではないかとも思った。

3-⑨

「自然の恵み」

毎日、学校まで同じ道を通って登校している。今まで遅刻しないように急いで歩き、周りのことを気にする余裕は余りなかった。しかしある朝、少し早めに家を出たことで、登校中の音に耳を傾けることができた。

聞こえてきたのは、鳥のさえずりや風に揺れる木の葉の音だった。車の音ばかりだと思っていた道にも、こんなに自然の音があったことに驚いた。その音を聞いていると、忙しい朝なのに心が落ち着き、前向きな気持ちになった。それと共に、自然はいつも私達の何気ない生活の近くにあるんだと感じた。と同時にその日は、いつもより元気良く学校生活を送ることができた。

この何気ない自然の音こそが、毎日を支えてくれる「自然の恵み」なのだと感じた。これからは登校中の小さな発見を大切にしたい。この体験から毎日、登下校を一つの楽しみとして学校に通っている。今まで気づかなかつたことを発見するために。

3-⑩

「Kさんの笑顔」

「おはよう。今日も頑張ろう。」小学校の頃からずっと朝の登下校の見守りを続けてくれていたKさん。小中学校の通学路には、毎朝、一日も欠かすことなく、Kさんの元気いっぱいな挨拶と温かい笑顔があった。Kさんから今日一日頑張るパワーをたくさんもらつた。でも、そのKさんの姿は今の通学路にはもうない。ご高齢のため、朝の見守りを引退されたのだ。

Kさんだけではない。通学路は、たくさんの地域の方々に見守られている。学校へ続く川沿いの通学路は、「おはよう」や「おかえり」の挨拶が飛び交い、笑顔であふれている。小中学生や地域の方々、みんなが幸せを感じられる場所。大好きな通学路だ。

毎日歩いている学校までの通学路は、地域の方々と繋がる、温かい場所なのだ。卒業までの残り3ヶ月、この通学路を一步ずつ踏みしめて歩きたい。地域の方々の温かい笑顔は、いつまでも私の心の支えになるはずだ。

3-⑪

「いつもの通学路で」

学校へ行く途中、いつもの川でカモの親子が泳いでいるのを見た。親ガモが前を泳ぎ、子どもたちは後ろを一生懸命ついていった。子どものカモは、まだ泳ぐのがあまり上手ではなく、列がバラバラになることもあった。しかし、親のカモがゆっくり進むと、またまとまって泳ぎ始めた。カモの親子の生活を見ていると、ほのぼのとした気持ちになった。

しばらく見ていると、親のカモが何度も後ろを振り返っていることに気づいた。声を出さなくとも、行動だけで子どもたちを気づかい、守っているように見えた。私はその姿から、「親」は目立たないところで「子」を支えているのだと感じた。自分も同じように守られてきたのだと気づいた。

この通学路での出来事を通して、身近なところに大切な学びがあると気づいた。普段は急いで歩いているが、少し周りを見ることで新しい考えが生まれることもある。毎日の通学路で見える景色にも目を向けていきたい。

3-⑫

「宝物の発見」

猫や草、自分の身長より高い植物など、自分たちの地域だからこそそのものがある。中でも、毎日笑顔で挨拶してくれる地域の人たちを発見した。

手を振ってくれたり、他愛のない会話をすることもある。しかしそのまでも、挨拶をすると「おかえり」と言ってくれる人もいた。何と返してよいか分からず、礼をしてみたり、「ただいま」と言ってみたりした。ある時、自分以外の人にも「おかえり」を言っている場面に遭遇した。自分たちの帰りを快く思ってくれているのだと分かった。それから返事を「ありがとうございます」にした。

帰りを快く思ってくれて、短い通学路だけでもこんなに温かいのだと思った。その温かさには感謝しかない。だからこの通学路は宝物だ。何気ない小さな発見かもしれないが、大切にしたい。そして、この宝物は他の人とも共有したい。だから、世代が変わった時は宝物を譲ってあげたい。